日刊 産業新聞
Japan Metal Bulletin
2026年（令和8年）
11月12日（木）
第21535号
Since1936

京葉鉄鋼埠頭、クレーン増設

岸壁クレーン更新も検討

ヨドコウや日本製鉄などが出資する京葉鉄鋼埠頭（本社＝千葉県市川市、北村宗一社長）は先月、9号倉庫の天井クレーンを1基増設し、2基体制とした。既存クレーンは老朽化が進んでおり、安定操業のためのBCP対策強化や安全・生産性の向上を図った。投資額は付帯設備を含めて9000万円。


今回増設したクレーン

今回増設したクレーンは、住友重機械搬送システム製の屋内型ラブトロリ式天井クレーンで、定格荷重は20トン。10月から稼働を開始している。既存クレーンは設置から43年が経過しており、突発的な修理やメンテナンスの際には機能が停止するリスクを抱えていた。2基体制としたことでバックアップが確立され、既存機が故障した場合も操業を継続することが可能となる。

同社は中長期的な競争力強化に向けた設備投資を進めている。昨年4月には屋外ホットコイル置き場の門型クレーンを更新し、荷役能力が拡大。本年度からは全長約300㍍の埠頭で岸壁の被覆修復工事を開始した。さらに、今後は岸壁クレーンの更新も検討している。

同社はヨドコウ市川工場のホットコイルやめっき・カラー鋼板を保管・出荷する拠点であり、日本製鉄の中核中継地でもある。高橋徹常務取締役は「これまでは償却が終わった設備を使い続けられたが、さまざまな設備が老朽化し、更新投資を進めていかなくてはならない時期にきている」として、物流機能の維持には継続的な投資が欠かせないとの見方を示す。

北村社長は「設備投資に加え、従業員の職場環境の改善、自動化設備の導入なども必要。再生産可能な体制を実現していく」と話す。